様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２３００

研究課題名（和文）第一次世界大戦100周年のために：現代イギリスにおける大戦の記憶の総合的研究

研究課題名（英文）For the Centenary of the First World War: A Comprehensive Study of the Memory of the War in Contemporary Britain

研究代表者
霜鳥　慶邦（Shimotori, Yoshikuni）

大阪大学・言語文化研究科（言語文化専攻）・准教授

研究者番号：１０４００５８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、第一次世界大戦100周年という決定的瞬間を迎えた現代イギリスと、関連する諸国（アイルランド、カナダ、オーストラリア、ベルギー、パキスタン）の文学・文化・社会・政治レベルの動向をリアルタイムで追いながら、大戦100周年が、歴史的境界線として、大戦の記憶にどのような影響（継承、変容、断絶など）を及ぼすことになるのかを学際的に検証し、大戦100周年の歴史的・現代的意義を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大戦100周年の期間に発表された多くの研究が、第一次世界大戦の歴史的再考を目的とするのに対して、本研究の最大の意義は、大戦100周年そのものを考察対象として設定し、相対化し、歴史化することで、我々自身の生きる今の時代における大戦の記憶のアクチュアリティを、グローバルかつ学際的な視座から明らかにした点にある。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the significance of the centenary of the First World War by exploring literary, cultural, social and political trends of contemporary Britain and related countries (Ireland, Canada, Australia, Belgium and Pakistan) and through interdisciplinary analyses of the influence of the centenary on the memory of the war.

研究分野：英語圏文学・文化

キーワード：第一次世界大戦　記憶　イギリス　アイルランド　カナダ　ベルギー　オーストラリア　パキスタン

１．研究開始当初の背景

本研究は、2006-2008 年度科学研究費補助金（若手研究（B））の研究課題「大戦（間）期英国文学・文化における第一次大戦後遺症の研究：身体・性認識を中心に」、平成 2009-2011 年度科学研究費補助金（若手（B））の研究課題「20、21 世紀イギリス文学・文化における〈第一次大戦神話〉の系譜の研究」、2012-2014 年度科学研究費補助金（若手研究（B））の研究課題「第一次世界大戦勃発 100 周年のために：現代イギリスにおける大戦の記憶の行方」の発展的延長線上に位置する。これまで積み上げてきた研究成果を踏まえて、そして、近年の大戦研究の豊かな学術的成果を最大限に吸収しながら、いよいよ大戦勃発 100 周年を迎えたイギリスと、それに関連する諸国において、大戦の記憶が継承・再考・再想像される様子をグローバルな視座から学際的に分析し、第一次大戦 100 周年の歴史的・現代的意義を明らかにしたいという動機に基づいている。

２．研究の目的

第一次世界大戦 100 周年という歴史的瞬間を迎えた世界の国々では、記念行事の開催、文学・芸術作品の発表、大戦研究の飛躍的な進展など、アカデミズムの内外でさまざまな盛り上がりを見せた。大戦 100 周年にあたる 2014～2018 年は、これまでの大戦の記憶を根本的に再考し、新たな展開へと向かうためのきわめて重要な転換点となった。本研究は、第一次世界大戦 100 周年という決定的瞬間を迎えた現代イギリスと、それに関連する諸国の文学・文化・社会・政治レベルの動向をリアルタイムで追いながら、大戦 100 周年が、歴史的境界線として、大戦の記憶にどのような影響（継承、変容、断絶など）を及ぼすことになるのかをグローバルな視座から学際的に検証し、大戦 100 周年の歴史的・現代的意義を明らかにすることを目指す。次の 5 点が主要な研究目的となる。

(1) 第一次世界大戦の記憶研究のグローバル化のための理論的基盤の構築

近年の大戦研究の最重要課題の 1 つは、国家単位の研究を超えた、グローバルな枠組みにおける大戦の根本的再考の実現である。本研究の主な考察対象であるイギリスを、ヨーロッパ諸国と旧帝国植民地をも含めたグローバルな枠組みの中で考察するために、最新の学術成果を吸収しながら、理論的基盤の構築を目指す。

(2) 歴史の教育、記憶の継承、詩の功罪：現代イギリスにおける戦争詩人の位置

大戦 100 周年を契機に、歴史理解をめぐる論争が激化した。そのポイントは、Wilfred Owen や Siegfried Sassoon などの一部の反戦的戦争詩人によって作り上げられた「神話的」「歪曲的」戦争記憶に対する、一部の歴史家からの批判である。本研究は、この論争の展開を追いながら、現代の世代における戦争詩の教育・受容・解釈・批判の特徴を検証し、さらに、大戦 100 周年を契機に、大戦の記憶の中心を占めてきた戦争詩人の位置づけがどのように変化し、大戦の記憶がどのように再構築されるのかを明らかにすることを目指す。

(3) 現代英語文学・文化における第一次世界大戦の記憶

大戦 100 周年を迎えたイギリスでは、詩や小説などの文学の領域から、映画、ドラマ、音楽といったポピュラー・カルチャーの領域まで、大戦をテーマにした多くの作品が発表された。本研究は、イギリスを含めた英語圏の小説、詩、音楽、映画、ドラマといった広範囲の現象を考察射程に収め、現代の世代による大戦の記憶の再想像／創造の文化的ダイナミクスを明らかにすることを目指す。

(4) 第一次世界大戦の記憶とツーリズム

大戦 100 周年を契機に、ロンドンなどの大都市や、ベルギーのイーペルなどのかつての戦地では、ミュージアムのリニューアル、戦場ツアーの充実化、土産産業の強化、ウェブ上での情報発信といった観光ブーム（とそれへの批判）が起きた。本研究は、ツーリズム研究とミュージアム研究の成果を踏まえ、現在の観光ブームが大戦の記憶に及ぼす影響（記憶のスペクタクル化、記憶の商品化、記憶の現代化、戦跡の観光地化、教育的効果）を明らかにすることを目指す。

(5) 第一次世界大戦 100 周年の歴史的意義

上記(1)～(4)を総合的に関連付け、さらに、各国の式典や政治レベルの言説を検証しながら、第一次世界大戦 100 周年の歴史的・現代的意義を明らかにする。

３．研究の方法

(1) 大戦期から現代までの戦争文学（小説、詩、回想録）、映画作品、音楽作品を入手し比較分析する。イギリスだけでなく、関連する国（アイルランド、カナダ、オーストラリア、ベルギー、インド、パキスタンなど）を幅広く射程に収める。

(2) 第一次世界大戦研究の最新の文献資料を入手し、研究の動向と課題を把握する。特に従来のナショナルな枠での大戦理解を超えたグローバルな視座からの研究の成果を最大限に吸

収する。

(3) 第一次世界大戦 100 周年に関する、世界諸地域のリアルタイムの政治的・社会的・文化的動向に関する情報を入手・整理する。

(4) イギリス、ベルギー、フランス、カナダ、アイルランドにて、ミュージアム、記念碑、墓地、追悼儀式などを中心に現地調査を行い、第一次大戦に関する一次資料と大戦 100 周年をめぐる文化状況に関する資料を入手し、研究の実証性を強化する。

４．研究成果

主要な研究成果は次の 5 点である。その他の成果と合わせて、単著にまとめる予定である。

(1) Wilfred Owen の詩的言語の 21 世紀的意義

第一次世界大戦の戦争詩人の中の一人にすぎなかった Wilfred Owen は、その後の歴史の中で、戦争詩人の代表的存在へと昇華した。それだけでなく、実に多様に変化・増殖しながら——時代、ジャンル、文化、宗教、ジェンダーといったあらゆる境界を越えながら——確実に我々とともに 21 世紀に生き続け、詩に限定されない様々な領域に影響を与え続けている。本研究は、20 世紀における Owen の正典化の背後にある文化的ダイナミクスを検証し、さらに、21 世紀を生きる多種多様な「Owen たち」の具体的な姿を分析した。考察対象は、Ted Hughes、Andrew Motion、Carol Anne Duffy といった英国桂冠詩人、Seamus Heaney、Michael Longley、Harold Pinter などの Wilfred Owen Poetry Award 受賞詩人、インドやパキスタンやシリアの現代詩人、2014 年にノーベル平和賞を受賞した Malala Yousafzai、タリバン兵、そして今世紀の戦争・テロ表象など、多岐にわたる。これらの広範囲にわたる Owen の影響力の分析を通して、Owen の詩的言語の 21 世紀的アクチュアリティを明らかにした。（5.主な発表論文等の〔雑誌論文〕②④⑧と〔学会発表〕②を参照）

(2) 現代イギリス文学における大戦の記憶

Sebastian Faulks は、2015 年に発表した *Where My Heart Used to Beat* で、ベストセラーになった *Birdsong* (1993)以来、久々に第一次世界大戦を本格的題材として取り上げた。本研究が着目するこの小説の潜在的ではあるが重要な特徴は、この小説が、20 世紀を舞台としつつ、実際には、21 世紀をも批判的意識とともに射程に収めようとしている点だ。本研究は、この小説が 20 世紀の歴史をどう再訪／再考し、それを 21 世紀に差し出そうとしているのかを検証し、この小説の 21 世紀的意義を明らかにした。具体的には、20 世紀を「精神病の世紀」として診断し、さらに『アエネーイス』の神話的枠を借りて描くこの小説の技法を分析し、さらに、Alfred Tennyson の *In Memoriam* を、小説のタイトル、エピグラフ、内容のレベルで用いる技法の効果を分析し、この小説の、21 世紀版 *In Memoriam* としての意義を明らかにした。（5.主な発表論文等の〔雑誌論文〕③を参照）

(3) 現代カナダ文学における大戦の記憶

第一次世界大戦でのヴィミー・リッジの戦いを起源とするカナダの建国物語において、従来、カナダ先住民による国家への貢献は、排除されてきた。本研究は、クリー族の少年の戦争体験を描いた Joseph Boyden の *Three Day Road* (2005) に注目し、この小説が、カナダの支配的国家物語にどのように介入し、新たなカナダ像を構築するのかといった点について、カナダ先住民の社会的・政治的運動をも射程に入れながら考察した。具体的には、大戦中の国外での戦闘と同時進行で存在していた国内の寄宿学校のトラウマ的記憶を描くことで、この小説が対位法的歴史理解を促す様子を指摘した。また、単線的プロットではなく、先住民のシンボルである円環に基づいたプロット技法を用いることにより、西洋的大戦イメージを脱中心化する様子を明らかにした。さらに、この小説を、カナダ真実和解委員会の長年の活動とその報告書（2015 年）、2015 年カナダ総選挙、Justin Trudeau 新内閣と先住民との関係といったコンテクストに置くことで、この小説の有する 21 世紀的存在意義を明らかにした。（5.主な発表論文等の〔雑誌論文〕⑤と〔学会発表〕⑤を参照）

(4) 現代アイルランド文学における大戦の記憶

Sebastian Barry の *A Long Long Way* (2005 年ブッカー賞候補作)の分析を通して、現代アイルランドにおける第一次世界大戦の記憶の特徴を明らかにした。従来の批評は、この小説が、アイルランドの国家的記憶から排除されてきた存在——そもそも、第一次世界大戦の記憶自体が長年にわたり排除されてきた——に光を当て、大戦期のアイルランドの複雑に分裂した状況を物語化した点を高く評価する一方で、この小説が、実際にはアイルランドの枠をはるかに超えた、よりグローバルなレベルの諸要素を、物語の中心的テーマとして射程に収めた作品であることの意義について論じることができていなかった。本研究は、戦場の多人種的・多言語的・多文化的・多宗教的状況——具体的には、アルジェリア兵、中国人労働者、グルカ兵、ベルギー人女性など——の表象に注目して作品を読み直すことで、本小説におけるアイルランド性のテーマは、戦場の混淆的状況との関係において理解されてこそ、独自性と批評性に満ちた文学的効果を発揮することを論証し、この小説が 21 世紀アイルランド大戦文学として持つ意義を明らか

にした。（5.主な発表論文等の〔雑誌論文〕①と〔学会発表〕③を参照）

(5) ベルギーにおける大戦の記憶

第一次世界大戦の激戦地として有名なベルギーのイーペルにおける大戦の記憶のあり方について考察した。具体的には、イーペルを代表する記念碑であるメニン・ゲートで、1928 年以降（第二次世界大戦中の一時期を除いて）毎晩行われている追悼儀式について、「記憶の場」と「観光の場」という観点から、現地取材を含めて分析した。儀式では、参加者全員が声をそろえて'We will remember them'という言葉を発し、1 分間の黙祷をする。このフレーズはもともとイギリスの詩人 Laurence Binyon の詩'For the Fallen' (1914)の一部である。これが本来のコンテクストから離れ、毎晩反復されるとき、'we'と'them'はいったい誰を指し、メニン・ゲートという記憶の場ではいったい何が記憶されることになるのか。この問題について、メニン・ゲートの追悼儀式を運営する「ラスト・ポスト」協会が、時代の流れとともに、「我々」と「彼ら」の定義を意識的に拡大し、記憶の普遍的共同体を目指す様子を明らかにした。だが普遍的・均質的共同体の形成の過程は、同時に、大戦の記憶の多様性と差異の消去の過程にもなり得る。共同体形成が抱えるこの問題について、酒井直樹の「共感の共同体」論や戦没者追悼に関する歴史を参照しながら考察し、記憶と観光の場において我々が自覚すべき自己批判的姿勢の重要性について指摘した。（5.主な発表論文等の〔雑誌論文〕⑦を参照）

(6) オーストラリアにおける大戦の記憶

第一次世界大戦での従軍看護師を主人公に設定する Thomas Keneally の *The Daughters of Mars* (2012)の考察を行った。この小説の最大の特徴であると同時に最大の論点となっているのは、500 ページを超える物語の最終章で、語り手が、自身がそれまで遵守してきたリアリズムの原則を破り、突然自らの自意識的声を前景化させ、読者に二つのヴァージョンの結末を提示して終える点だ。本研究は、歴史記述的メタフィクション（特に John Fowles の *The French Lieutenant's Woman*）との比較、Keneally の代表作 *Schindler's List* との比較、さらに、テクスト中のキーワードである「膜」に着目しながら読解することで、この小説のエンディングの技法を検証し、この小説の、21 世紀歴史小説としての意義を明らかにした。

(7) パキスタンと大戦の記憶

イギリス在住のパキスタン系作家 Kamila Shamsie の *A God in Every Stone* (2014)の考察を行った。この小説における、第一次世界大戦のアジア的視座からの再想像の特徴、Abdul Ghaffar Khan 率いる非暴力ナショナリズム運動の歴史を掘り起こすことの意義、この小説における仏教のテーマの重要性などについて考察した。また、この小説を、2010 年にイギリス初のムスリム女性閣僚となって話題を呼び、偶然にも *A God in Every Stone* の出版年である 2014 年に自ら大臣を辞任した、Sayeeda Warsi の言動と関連づけることで、この小説の存在意義をより明確に浮かび上がらせた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 8 件）

① SHIMOTORI Yoshikuni, '"Ah, We're All Pagans Here": The Irishness, Globalness and Twenty-First-Century-ness of the Memory of the First World War in Sebastian Barry's *A Long Long Way*', *Studies in English Literature*, vol.60, March 2019, pp.1-20, 査読有.

② 霜鳥慶邦、「21 世紀の Wilfred Owen（たち）」、『第 90 回大会 Proceedings』、2018 年 10 月、pp.77-78、査読無。

③ 霜鳥慶邦、「21 世紀の *In Memoriam*―Sebastian Faulks, *Where My Heart Used to Beat* における記憶の美学」、『言語文化研究』44、2018 年 3 月、pp.55-68、査読有。

④ 霜鳥慶邦、「Wilfred Owen の詩的言語の今日的アクチュアリティをめぐって」、『交錯するレトリック―精神と身体、メタファーと認知』、2017 年 6 月、pp.3-8、査読無。

⑤ SHIMOTORI Yoshikuni, 'A Long Road towards Healing and Reconciliation: Joseph Boyden's *Three Day Road* and the Canadian Memory of the First World War', *Studies in English Literature*, vol.58, March 2017, pp.39-56, 査読有.

⑥ 霜鳥慶邦、「カナダ先住民の傷をめぐる政治と文学―Joseph Boyden、寄宿学校制度、カナダ真実和解委員会、2015 年総選挙」、『ポストコロニアル・フォーメーションズ』XI、2016 年 6 月、pp.3-13、査読無。

⑦ 霜鳥慶邦、「三万回の「ラスト・ポスト」へ向かって―メニン・ゲートと第一次世界大戦の記憶」、『年報カルチュラルスタディーズ』3、2015 年 6 月、pp.130-42、査読無（慫慂論文）。

⑧ 霜鳥慶邦、「記憶の継承、歴史の教育、詩の功罪―第一次世界大戦 100 周年と戦争詩人」、『ポストコロニアル・フォーメーションズ』X、2015 年 6 月、pp.17-26、査読無。

〔学会発表〕（計 5 件）

① 霜鳥慶邦、「ある英国詩人の広島の印象―原爆、記憶、観光」、パネル『グローバルな「移動」をめぐって』、カルチュラル・タイフーン 2018、龍谷大学、2018 年 6 月。

② 霜鳥慶邦、「21 世紀の Wilfred Owen（たち）」、シンポジウム『100 年目の Wilfred Owen』、

日本英文学会第 90 回大会，東京女子大学、2018 年 5 月。
③ 霜鳥慶邦、「‘Ah, we’re all pagans here’—Sebastian Barry, *A Long Long Way* における第一次世界大戦の記憶のアイルランド性、グローバル性、21 世紀性」、日本英文学会関西支部第 12 回大会、京都女子大学、2017 年 12 月。
④ 霜鳥慶邦、「『V.』の「V.性」をめぐって―言語、歴史、人種、ジャズ」、パネル『トマス・ピンチョン『V.』再考：ポストモダン文学作品におけるカルチャーと女性を中心に』、カルチュラル・タイフーン 2016、東京藝術大学、2016 年 7 月。
⑤ 霜鳥慶邦、「西部戦線のファースト・ネーション―Joseph Boyden, *Three Day Road* と大戦の円環的記憶」、パネル『人種の表象と記憶』、カルチュラル・タイフーン 2015、リバティおおさか、2015 年 6 月。

〔図書〕（計 2 件）
① 霜鳥慶邦他、『英語教育徹底リフレッシュ―グローバル化と 21 世紀型の教育』、今尾 康裕・岡田 悠佑・小口 一郎・早瀬 尚子（編）、開拓社、2017 年、313 頁、pp.296-304。
② 霜鳥慶邦他、『D. H. ロレンス書簡集 VIII 1917-1918』、松柏社、2016 年、678 頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
特になし。

６．研究組織

(1)研究分担者
特になし。

(2)研究協力者
特になし。

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。